

よく ひとりぼっち だった

モーリー・
ロバートソン

よくひとりぼっちだった

モーリー・ロバートソン

文藝春秋

著者略歴

1963年、ニューヨーク生まれ。父はアメリカ人医師、母は日本人ジャーナリスト。69年、広島の小学校に入学。以後、中学、高校と、日米半分ずつの教育を受けた。ハーバード大、MIT、イエール大、プリンストン大、スタンフォード大、カリフォルニア大バークレー校、そして東大に、すべてストレートで合格。81年4～7月まで東大(理I)、81年9月よりハーバード大学に在学(電子工学専攻)。83年秋から、本書執筆のために休学中。CBSソニーからLP『ストイック・哀愁ゼミナール』を出している。

よくひとりぼっちだった

1984年 8月15日 第1刷

1991年 4月25日 第6刷

著 者 モーリー・ロバートソン

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23

電話 03-3265-1211(代)

印 刷 凸版印刷

製 本 矢嶋製本

©Morley Robertson 1984 Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

ISBN4-16-338670-X

よくひとりぼっちだった——目次

序章	7
広島	17
ノースカロライナ	41
サンフランシスコ (一)	63
サンフランシスコ (二)	85
第二の序章	113
ふたたび広島 (一)	123
ふたたび広島 (二)	161

g 179

まだ広島 197

ふたたびサンフランシスコ 221

高岡(一) 231

高岡(二) 251

Ω 変身 267

あとがき 295

あとがきのあとがき 297

装幀・坂田政則

カバー写真・Ted Polumbaum ©1984

よくひとりぼっちだった

序章

つみきのおへやがありました。

そのおへやは、かみときで、できています。

そしていろんなきれいないろがみえます。

みんなでそのおへやにはいつてあそぶのです。

おはなしをしていると、じりりいんがなります。

じりりいん

じりりいん

せんせいがやってきました。みんなしずかになります。

せんせいは、いろんなことをおしえてくれます。

みんな、せんせいのいうことを、うさぎのおみをたてて、きいています。

せんせいはきびしいけど、やさしいひとです。

つみきはいろんないろ。

あか、あお、きいろ、しろ。

つみきのおへやはゆっくりうごいています。

ほら、そおっとうかがってごらん。

うごいているでしょう。

それもそのはず、つみきのおへやは、おおきなおふねになつてゐるのです。

「ええっ、ほんとう？」

つみきのおへやは、おふねになつちやつたの？」

そうです。みんながゐるつみきのおへやは、おおきなおふねになつてゐるのです。

「へえ、すごいなあ」

うさぎのおみできくと、せんせいのこえは、おふねのきてき。

ぽおお。

ひくく、うなるようですね。

うさぎのおみできくと、せんせいのこえは、おふねのきてき。

ぽおお。

ほんとうは、やさしいうなりごえですね。

みんながのつてゐるふねは、おおきいふねです。

おおきいふねにのつてゐるから、みんなはふなのりさんです。

ふなのりさんは、めがねをします。

みんなもかけてゐるでしょう？

「このふねは、どこかなつかしいなあ」

わかりますか？

このふねはね、ほんとうは、みんな、まえにものつたことがあるんですよ。

「えっ、ほんとう？」

「どこで？」

よくかんがえてみましょう。

まえにも、このふねにのっていたでしょう。

「うーん。

どこかで、のっていたなあ。

どこだろう……

あ、そうだ。

あかちゃんの時も、のっていたよ。

おうちで、おんぶされていたの。

そしたら、そのときも、おふねにのっていたよ。

みんなも、そうしていたよ」

真っ黒の学生服を着こんだ同級生が、規則的に教室を占める授業風景は、僕を威圧した。そこには、何世紀もかかって築かれた機構があり、それに抗することは考えられなかった。

何でも規則的だ。先生のしぐさ、その号令で生徒たちがやる勉強作業も。眼鏡を、隣の席にいる子も、その隣の子もかけている。体格は違っても、ズボンはみな真っ黒、同じ色が前列まで隊をなして続いている。

眠るような居心地——僕は目が醒めているが、眠るようにどこかで安らいでいる。背筋を伸ばし、きちんと座る僕は大船に乗っている。

大きな船の上、みんなが一緒に持つ時。その時を僕は完全な形では持っていなかったが、いまから共有に加われるのだった。それが嬉しかった。

この場所を抜け出すことはありえない。ここは僕にとって塹壕^{ざんごう}だ。この塹壕に入るために、僕は日本に帰ってきたのだ。左右に広がる泥の壁、この壁は僕に解放と夢をもたらず。抑圧の樂園。

アメリカの学校は合理的で自由だったが、生徒間のやりとりは荒々しく、一つの組に固まって先生を家父長とした一族をなすこともなかった。簡単に言えば、テレビの「青春物語」がアメリカでは生まれなかりか、生まれ出る土壌さえもなかった。

例えば、みんなで朝礼に立ち、号令に合わせて体操をすることもなければ、授業の始めと終りに級長が起立、礼、着席、の指揮を取ることもしなかった。そして、横の連帯意識もなければ、先生を生徒が慕う縦のつながりも薄かった。先生はたいして尊敬もされず、また生徒に対する親身な思いやりを示すこともなかった。教室、廊下、体育館の掃除を担当するのではなく、傭い人夫が生徒の目を避けるかのように、モップ、バケツ類のついた車を引きまわして行なう。やさしい表情をした食堂のおばさんはいず、コンベヤーのむこうの手が食物ののった皿をこちら側のプラスチック製トレイに放り投げる。体の大きい男子生徒は暴力的に廊下で声を張り上げ、女生徒は車を持たない男子には振り向きもしない。そして、人種民族ごとに生徒は小群をなし、国境を形成していた。

高二のはじめ、財政緊縮のために教師の大幅首切りがカリフォルニア州政府によって行なわれ、僕の期待する聖人としての先生のイメージは、失業を前にした社会人の現実^{じじつ}に裏切られた。

新学期二週間目のある日。夏休み中行っていた日本から戻ったばかりの僕は、「アイパー」の頭にひらひらの「羽織」をまとい、授業に出た。アイパーは東京でかけた。羽織はゆかた式のを着ていた。後で考えるとあのヒラヒラの格好はさぞかし女性的で、教師の目には軟弱に映ったであろうと思うのだが、その日の僕には、ちょっと人目を引く冒険以外の何物でもなかった。アメリカの公立高校の服装は自由であつたし、一部の生徒たちに比べると、僕のいで立ちははるかにおとなしかった。そして、日本で夏中チャホヤされて自信をつけていたので、僕は少し日本的なものを主張しようと思っていた。

数学の授業中のことだ。日本の高校で夏に習ってきたことより随分やさしい内容を非能率に教えていたので、僕は得意な気持ちになり、公然と隣の子にお喋りを始めた。前の年の幾何の先生であつたなら、気長に放っておき、ワルさが限度にきた場合は、静かに生徒に「退場」をさせるのだが、このときは教師も状況も悪かつた。教師数削減のしわ寄せで教師一人あたりの持ち時間が多くなり、いらいらがつつていたのだが、十五歳の僕には、そこまで大人の気持ちがつかめていなかった。教師は、日本から「流行」を仕入れてきて「通」になつたと思ひこんでいる僕の名を呼び、前の席に移るように命じた。そして、僕はいたずらっ子のような表情で席を立てて、二十人いる教室の前の方に向かつていった。やおら、教師の声色が変わり、「もういい、外へ出ろ」と言つた。僕はどうせ、この授業内容はわかつているのだからいいや、と依然誇らしげに教室のドアをくぐつた。

と、そのとき、信じられないことが起こつたのだ。後ろからドン、と背中を突かれ、拍子に僕の手からバッグが落ちた。不意のことなので、反射的にバッグを拾おうとしたところに、革靴の足がそれより一呼吸早くバッグを蹴飛ばし、バッグはスーッとという音を立てて、暗い廊下を滑っ

ていった。

はっと後ろを向くと、恐ろしい形相をした四十代の数学教師の顔が目の前にあり、僕は襟元を掴み上げられて、ぐいぐいと後押しされた。三メートル幅の廊下を一気に押されて、反対側のロッカーにガチャン、と音を立てて、僕は押しつけられた。僕を押さえつけていたのは、不良の上級生ではなくて、数学の「先生」である人だった。その男は、ドスの効いた低い唸り声で、「この糞野郎、今日中にもう一度会ったらぶっ殺してやる！」と言うなり、襟元をつかんでいるこぶしを一層強く握りなおした。僕はおびえと驚きで、身動きもとれず、なすがままにされていた。

教師が教室に入り、ドアを大きな音をたてて思いきり閉めた。僕はそこに立ちすくみ、涙を流すまいとして、懸命だった。

聖域を犯されたような不純さとみじめさに打ちひしがれ、僕はやっとバッグのところまで歩いて行って拾い上げ、泣いているのを見られないよう、急いで階段へ駆けて行った。一息深呼吸を入れて、すぐ一階のアドバイザー担当の教職員のところまで走っていった。

首切りで教員数が少ないため、そのアドバイザーの部屋の前の控え室には、いつものように列ができていた。僕はそれにかまわず、つかつかと教員の部屋に入っていく、何かを訴えようとして、何も言い終らない先に声を噎^からしてむせび泣いた。側に座っていた生徒も教員も、なぜか無表情に見えた。日本だったらこの場合、誰かが背中にもかけてくれそうなのだが、この部屋では、皆が泣いているぶざまな僕を客観視するだけだった。教員は邪魔そうな声で、いま忙しいうから列について、と言ったきり、僕には注意せず、前に座っていた生徒との話を再開した。僕にはこのとき、泣いていることさえが馬鹿馬鹿しく思われた。

家に帰ってから、その話を母にしながら泣いた。十五歳の僕にとって、第二の父親のような

人であるはずの先生が、鬭争本能剥き出して個人的に僕をこづきまわしたことは、大きなショックであった。せっかく広島の名な中学を退学してまで、二年間順応しようとしてきたアメリカが、僕を裏切ったようでもあった。日本で習った調和の道徳も蹂躪された気がした。

翌日、両親が僕と一緒に登校し、他の教室同様、見栄えのしない応接室で、校長と教師に会った。学校側は、僕を押し倒した教師の言い分だとか、これは教師と生徒の間の個人的問題であって、学校には直接責任はない、という理屈を並べたてのだった。憤った父が、訴訟に持ちこむことをほめかした時点で、初めて学校側は低姿勢になった。

困ったことには、僕のとらねばならぬ高レベルの数学のクラスを教えているのは、今学期はこの教師一人になってしまっているということだった。とてもこの教師のクラスに出る気はしなかった。レベルの低いクラスに下がるという案は、考える余地もなかった。日本の中学で鍛えられたおかげで、僕は数学は学年でトップだったし、学力より下のクラスで勉強しなければならなときの退屈さともじめさは、日本の学校の英語の授業でいやというほど味わってきた。

他校へ転校しようにも、ほかに適当な学校がなかった。ローエルハイスクールというこの公立高校は、サンフランシスコ市内外で、公私立あわせて一番アカデミックな学校で、成績優秀者しか入学させず、全米のベストテン・ハイスクールの一つという有名校だったのだ。

僕はアメリカの学校に失望していた。失望というより絶望に近かった。両親との懇談の席上で学校側が示した態度は、学校側の立場の弁護と責任回避とに終始していて、僕という一人の学生の心が受けた傷手などは無視しているようにみえた。生徒に対する愛情や思いやりはかけらもなかった。

いまになって考えると、この程度の暴力沙汰は、アメリカの子供は幼時から体験して育ってき